

天竜川ダム再編事業環境検討委員会

第1回検討委員会資料

平成18年7月5日

国土交通省 中部地方整備局 浜松河川国道事務所

目 次

1 流域・河川の概要	1
1-1 流域の状況.....	1
1-2 流域の地質と土地利用.....	1
1-3 流域の気候・降水量.....	2
1-4 流況.....	2
1-5 天竜川の河道特性.....	3
1-6 天竜川における洪水被害.....	6
1-7 天竜川の治水計画.....	7
1-8 天竜川（中下流部）における水利用.....	7
1-9 本川ダムの概要.....	8
1-10 砂利採取の現状.....	9
1-11 天竜川中下流部の生物環境.....	10
1-12 河口～海岸の生物環境.....	11
1-13 漁獲等.....	11
2 天竜川ダム再編事業の概要	12
2-1 事業計画の概要.....	12
2-2 事業の必要性.....	12
2-3 洪水調節計画（案）.....	13
2-4 恒久排砂対策（案）.....	15
3 天竜川中下流部における環境の現況分析	16
3-1 物理環境の現況分析.....	16
3-2 生物環境の現況分析.....	30
4 天竜川ダム再編事業で目指すもの	41
4-1 天竜川中下流部における望ましい環境.....	41
4-2 天竜川ダム再編事業で目指すもの.....	41
4-3 流砂系に働きかける行為と派生する現象.....	42
5 予測・評価手法の検討	43
5-1 再編事業による環境変化.....	43
5-2 環境変化に対する予測・評価手法の検討.....	43
5-3 これまでに実施している予測手法とその課題.....	46

1 流域・河川の概要

1-1 流域の状況

天竜川は長野県諏訪湖にその源を発し、ほぼ南に流下し、遠州灘に注ぐ、南北延長 200km、東西幅約 40km の羽状流域を呈し、その流域界には 3,000m 級の山岳地帯が連なり、流域の中央部にも 1,000~1,500m の山間部が横たわっている。

- 上流部は、大規模な河岸段丘が発達した伊那盆地。
- 中流部は、山間部を蛇行し、溪谷を形成。
- 下流部は、遠州灘までの大きな扇状地。

流域概要	
流域面積 (全国第12位)	5,090km ² (山地 89%、平地 11%)
流路延長 (全国第9位)	213km

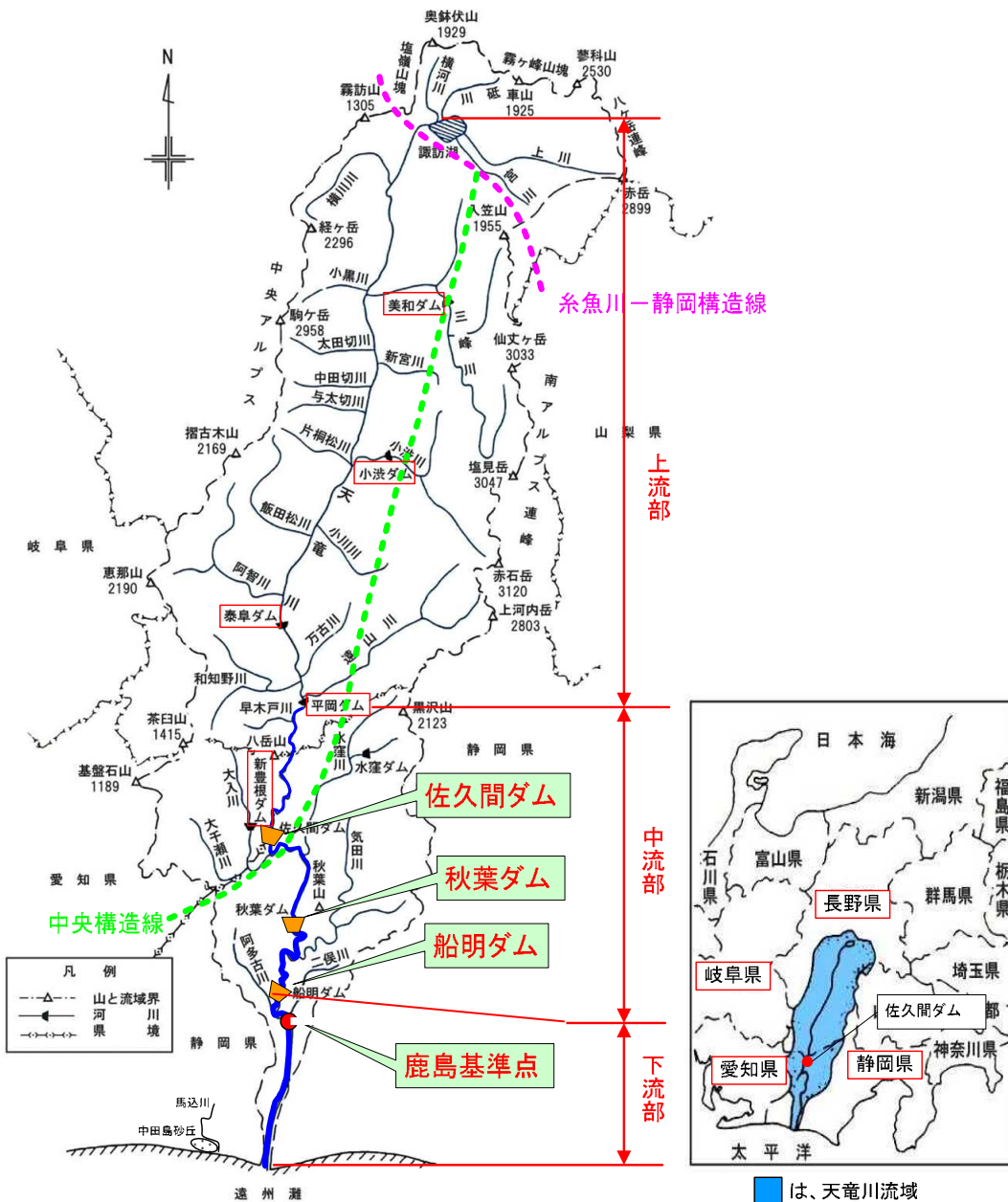


図 1-1 天竜川流域一覽図

※本委員会では中流部と下流部の境を、船明ダムとした。

天竜川流域は、長野、愛知、静岡の 3 県にまたがり、各県の占める面積は、長野約 3,700km²、愛知約 280km²、静岡約 1,110km² である。流域内の主な産業は、上流部では精密機械、農林業が、中流部では農林業、内水面漁業が、下流部では輸送機械・楽器関連産業、農業、漁業が挙げられる。

流域内人口は、平成 7 年現在約 72 万人で、上流部約 56 万人に対し中・下流部は約 16 万人と 3.5:1 であるのに対し、想定氾濫区域内人口は、上流の約 15 万人、中・下流は 45 万人と 1:3、また想定氾濫区域面積は、上流約 140km²、中・下流で約 210km² であり面積比は 1:1.5 である。

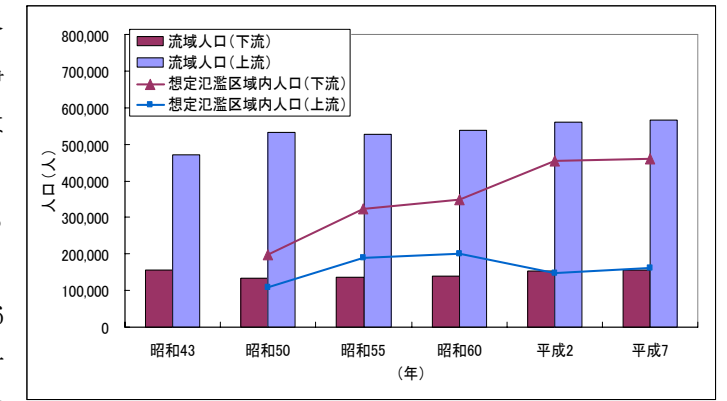


図 1-2 流域人口、想定氾濫区域内人口 経年変化

出典：平成 12 年度 河川現況調査

1-2 流域の地質と土地利用

天竜川流域には、中央構造線がほぼ南北に縦貫し、その周辺に破碎帯が分布するとともに、西側には風化花崗岩が広く分布しているため、地形の急峻さとも相まって大変脆い地質構造を呈している。

流域内の土地利用は、上流部の河岸段丘や谷底平野では農地や市街地となっており、上流部や中流部の山地斜面では森林が広く分布している。中流部の谷底平野には、集落が多く分布しており、下流部の扇状地には市街地や農地、工場等が広く分布している。

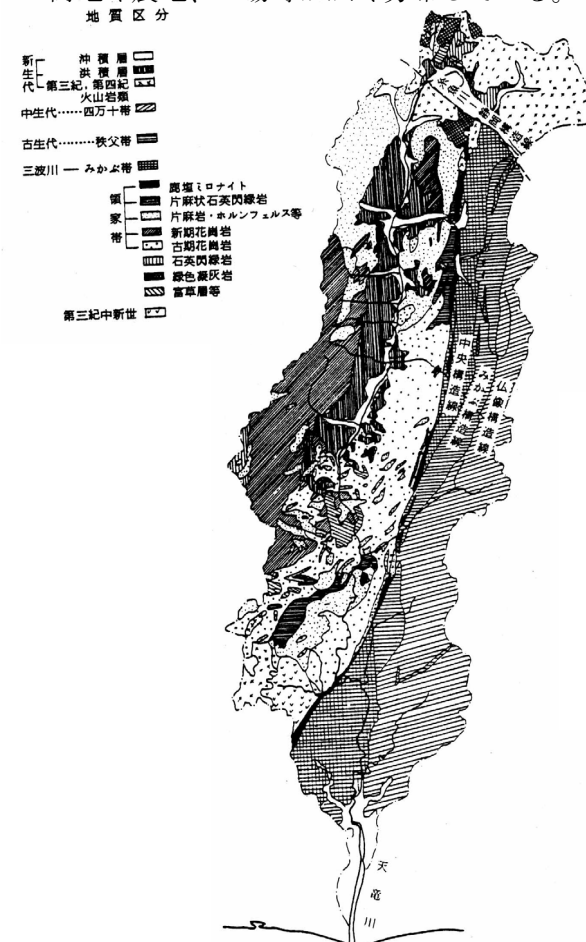


図 1-3 天竜川の地質区分図

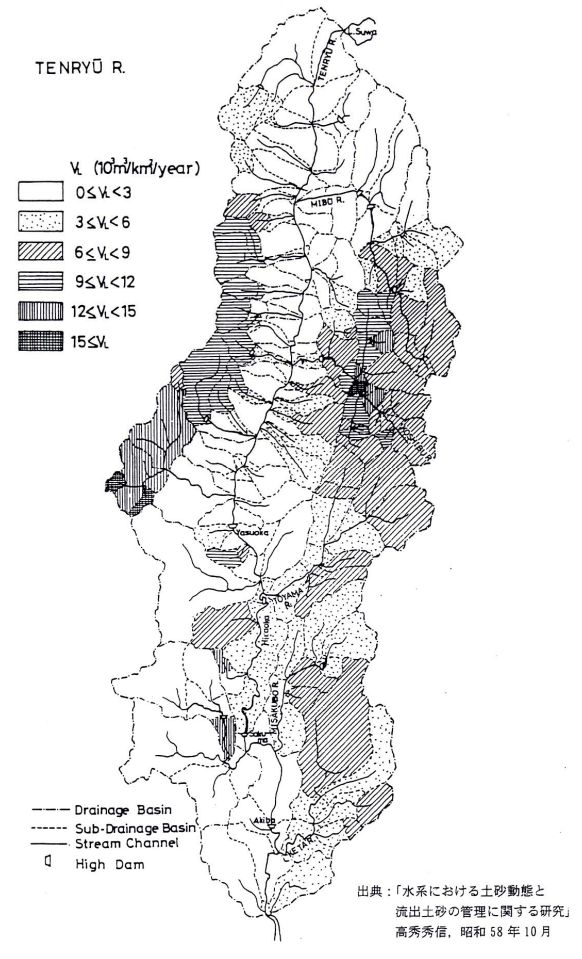


図 1-4 天竜川における年平均崩壊土砂量 (昭和 35 年~昭和 52 年)

出典：「水系における土砂動態と流出土砂の管理に関する研究」高秀秀信、昭和 58 年 10 月

1-3 流域の気候・降水量

天竜川流域は、上流部は内陸性気候であり、下流部は表日本型気候を示し、年平均気温は15～16℃である。降雨量は梅雨期、台風期に多く、年間の総雨量で見ると多雨域は、大井川流域と境をなす気田地方と、恵那山から木曾駒ヶ岳にかけての中央アルプス周辺で、いずれも2,800～3,000mmとなっている。

総じて北に上るほど降雨量は少なくなり、諏訪盆地では1,400mm前後、伊那谷主要部で1,600～1,800mmと内陸性気候となっている。中流域山間部では地域差が著しく、恵那山に続く山麓、気田川流域では2,600～3,000mm、天竜川本川沿いで2,400～2,600mm、遠州平野で2,000～2,200mmとなっている。

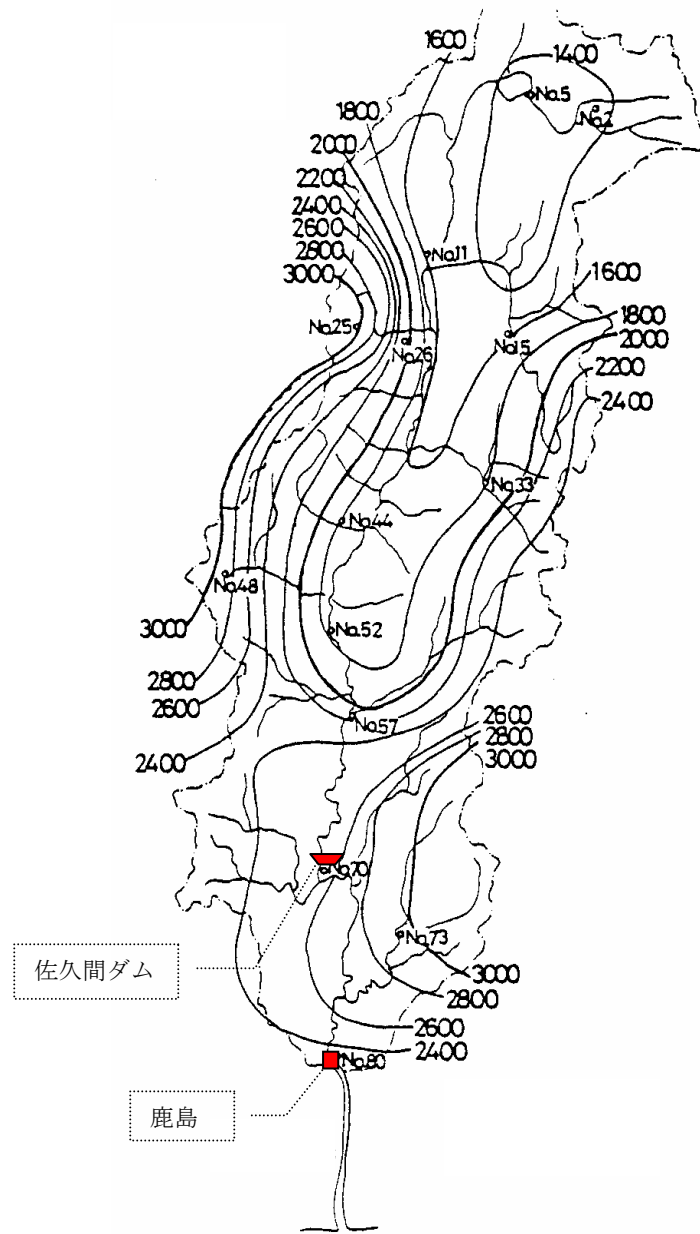


図 1-5 年総雨量の分布

1-4 流況

天竜川の中下流部における年間流況の経年変化は、次図に示すように佐久間ダム地点では年最大日流量や年2位日流量に減少傾向が見られる。豊水、平水、低水、渇水流量には、明瞭な年変動は見られない。

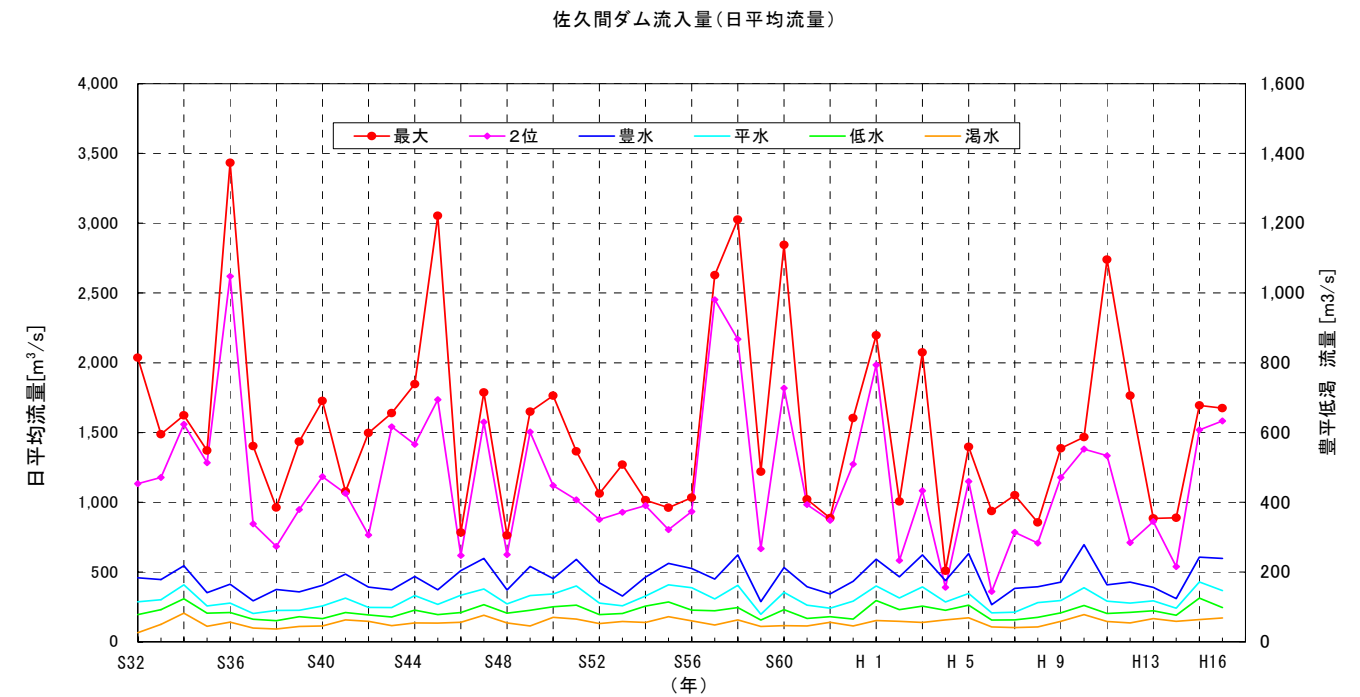


図 1-6 佐久間ダム地点の流況の経年変化

鹿島地点でも、年2位日流量には減少傾向が見られるものの、豊水、平水、低水、渇水流量には、明瞭な年変動は見られない。

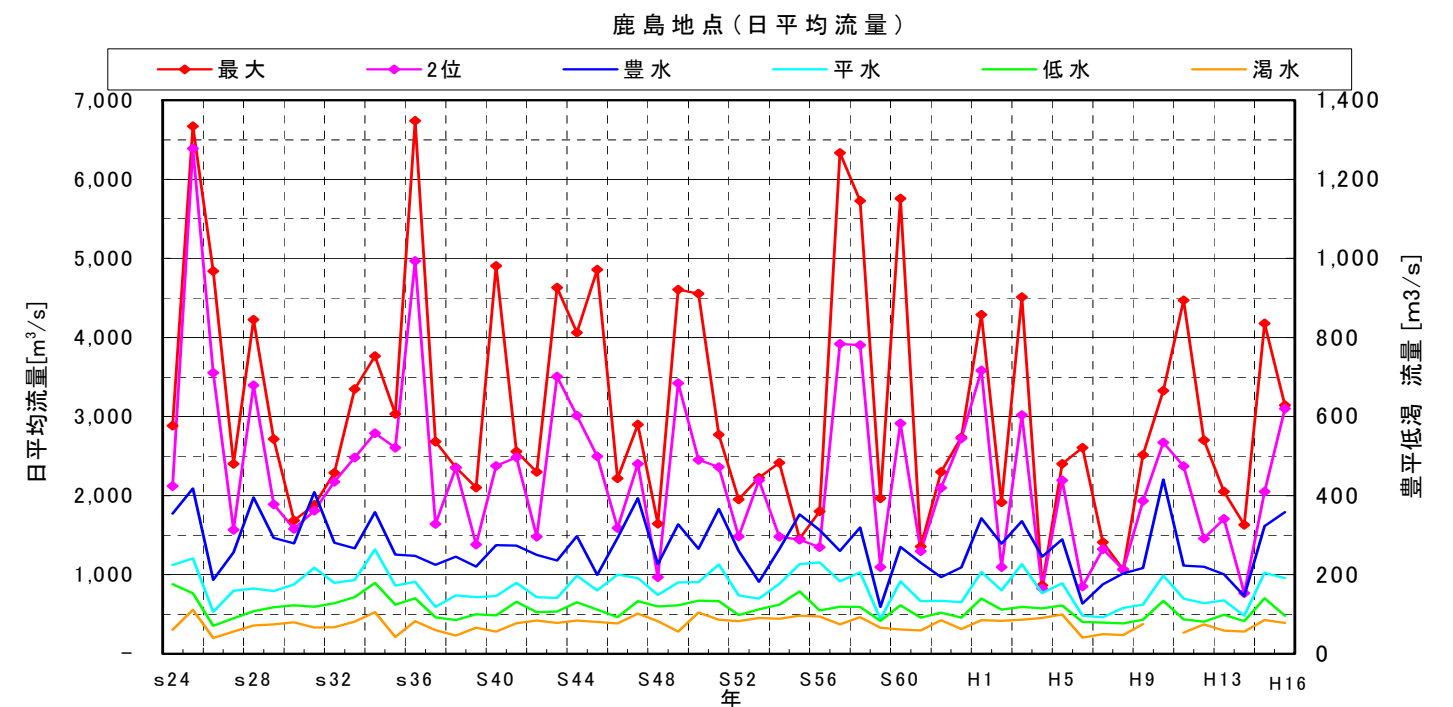


図 1-7 鹿島地点の流況の経年変化

1-5 天竜川の河道特性

天竜川流域は、堤防築造や派川締め切り等の治水事業が古くから行われており、これらに伴い流路も歴史とともに変遷してきている。

上流部における近代以降の流路の変遷は、図 1-8 に示すとおりであり、大正初期と昭和 50 代後半を比較すると、断層谷の谷底を流れるため、流路に大きな変化は見られなく、更に築堤や霞堤の設置に伴い河道区域が固定化された状況にある。

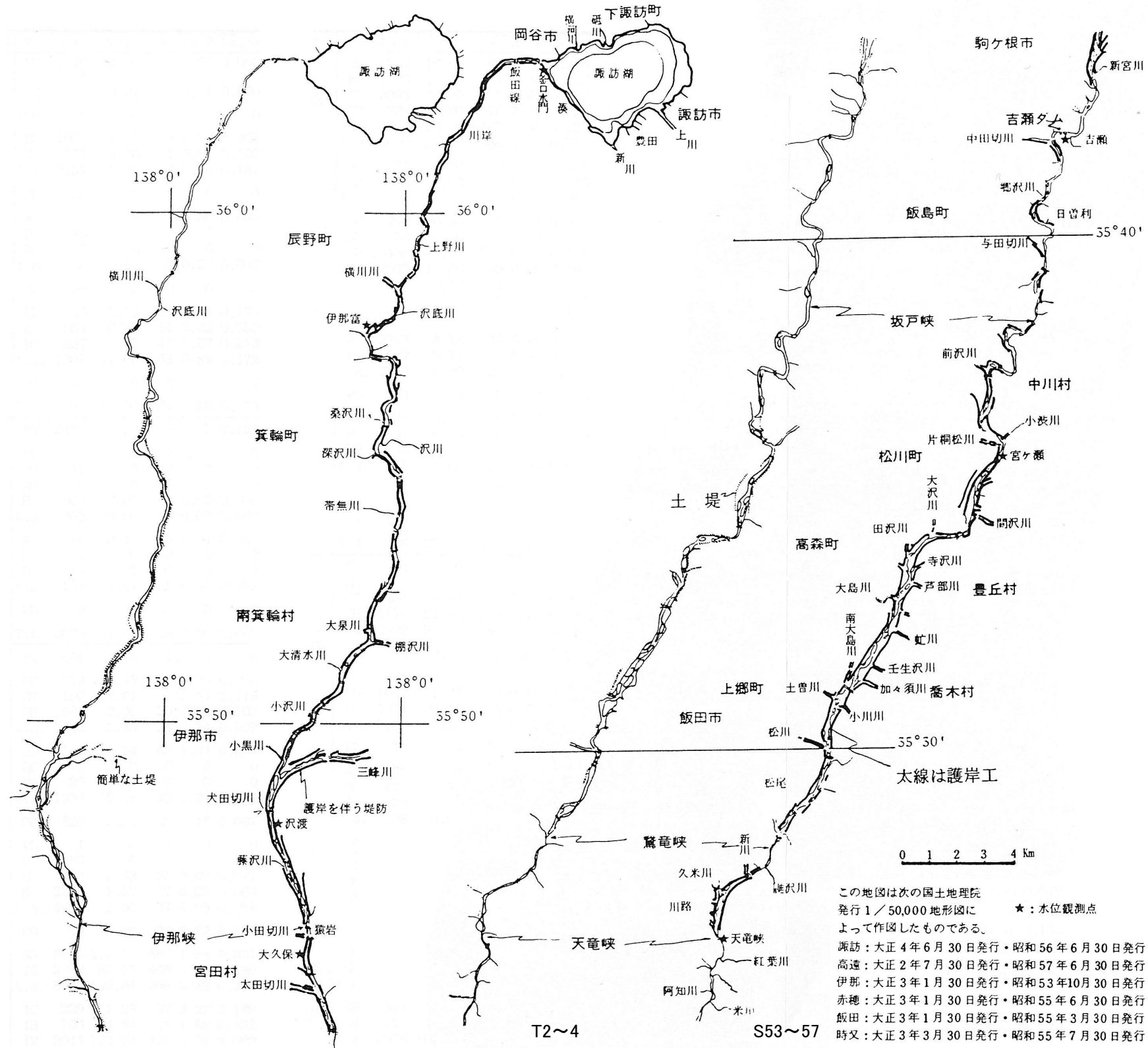


図 1-8 天竜川上流部の流路の変遷

出典：「天竜川上流部の立地と災害」（昭和 61 年 7 月）

企画監修・発行：建設省中部地方建設局 天竜川上流工事事務所

下流部における近代以降の流路の変遷は、図 1-9 に示すとおりであり、昭和 33 年の西派川締め切り後は堤防内の河道区域が、現状とほぼ同じとなり、戦後最大洪水が起こった昭和 43 年以降は低水路（滯筋）が概ね固定化された状況にある。

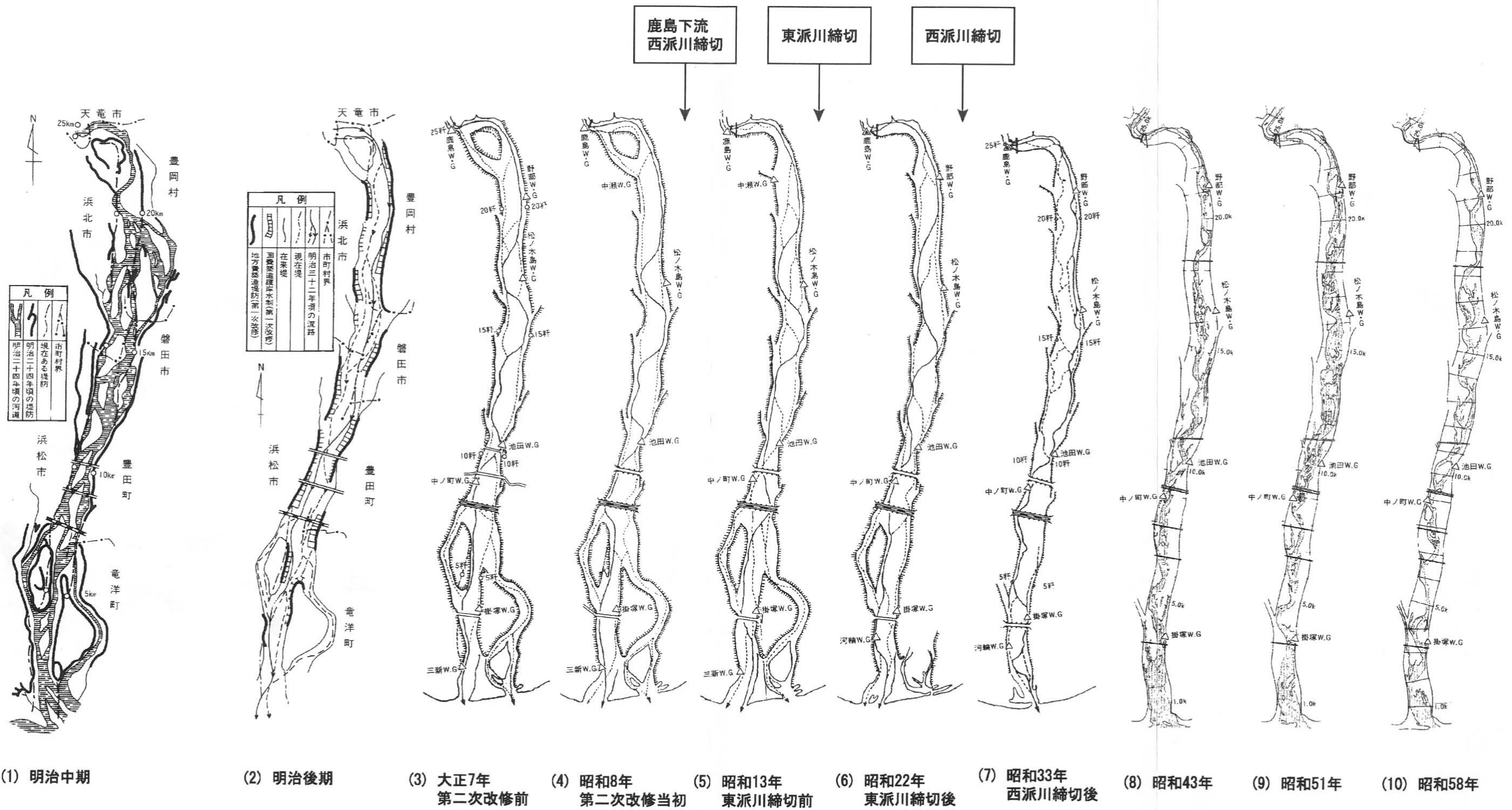


図 1-9 天竜川下流部の流路の変遷

出典：「天竜川（治水と利水）」（平成 2 年 10 月）

企画監修・発行：建設省中部地方建設局 浜松工事事務所

天竜川中流部、下流部における河床勾配は、最近年では次図に示すようにダム貯水池内を除いては、概ね 1/300~1/500 程度である。下流に行くほど明らかに緩やかになる縦断形状ではなく、比較的急流のまま河口に至る。

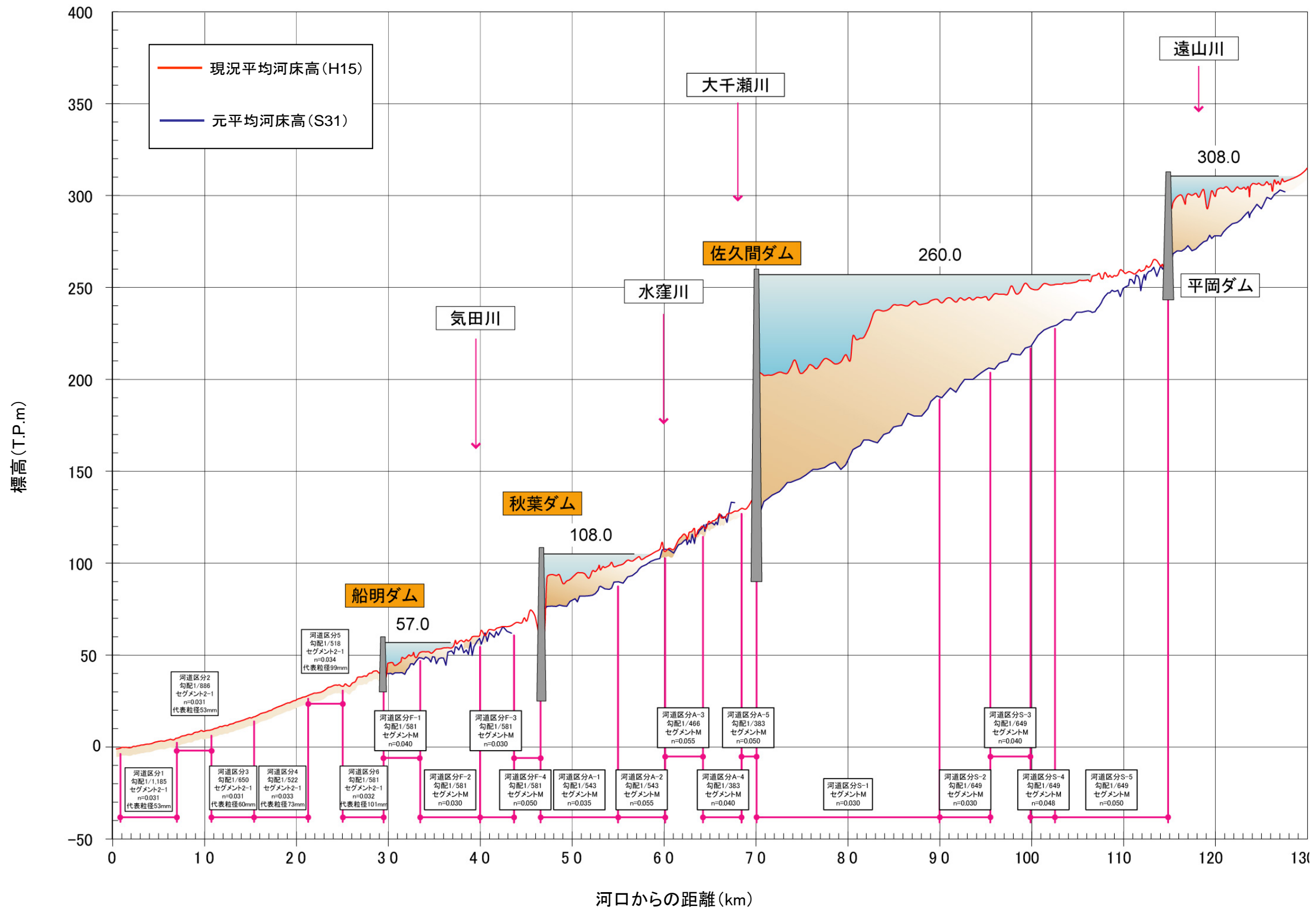


図 1-10 天竜川中流部～下流部の河床勾配の現状

1-6 天竜川における洪水被害

天竜川の洪水は、急峻な地形と脆弱な地質のために、多量の土砂流出を伴うことが多い。

土砂の生産及び流出は、地質的・地形的に脆弱な中央アルプスの風化花崗岩帯や、南アルプスの破砕帯で著しく、急流を下った土砂が河床に堆積し河床が上昇したり、山腹崩壊が本川をせき止めたりすることによって、沿川の被害を助長している。



写真 1-1 明治 44 年 8 月洪水により決壊した東海道線



写真 1-2 大鹿村大西山の大崩壊により、小渋川が一時的に土砂でせき止められた。(昭和 36 年撮影)

洪水被害の歴史は、次表に示す通りで古くから悩まされてきたことが分かる。

表 1-1 洪水被害の歴史

年月	該当区域		
	下流部 (河口～船明ダム)	中流部 (船明ダム～平岡ダム)	上流部 (平岡ダム～)
701 年 8 月			高遠ダム下流で氾濫
761 年 7 月	浜北市で約 1000m 破堤 (破堤箇所を修築)		
1652 年 6 月			飯田市川路で氾濫
1698 年 7 月下旬	中ノ町で破堤 浜松市の浸水 10 日余り続く		
1705 年 6 月下旬	天竜川, 気田川, 阿多古川, 二俣川等で大規模氾濫		
1715 年 6 月下旬 (未の満水)			飯田市で被害甚大
1719 年 8 月中旬 (亥年の洪水)			伊那谷で氾濫
1755 年 8 月 (亥年の洪水)			伊那谷で氾濫
1757 年		(佐久間で河床掘削)	
1778 年	(天竜川右岸は彦助堤で連続堤となる)		
1789 年 6 月中旬	浜北市で 720m 破堤 中ノ町, 豊田町でも破堤 (二俣川河口の付替え完了)	気田川 5.4m 増水	伊那谷で氾濫
1804 年 8 月下旬 (子の満水)			川路で被害甚大
1828 年 6 月下旬 (子の満水)	磐田市で破堤 二俣川河口で破堤	天竜川, 気田川, 阿多古川が氾濫 船明村で 12.3m 増水し破堤 気田川で 18m 増水	川路で被害甚大
1835 年	(鹿島下流に新規堤防完成)		
1850 年 7 月下旬	浜松市 (富田, 常光, 末島) で破堤		
1860 年 5 月上旬	右岸破堤に伴う氾濫水が浜名湖まで流出。 浜松市の浸水 100 日余りに及ぶ。 竜洋町で 180m の破堤。	阿多古川で 17m 増水	
1862 年		(佐久間町で堤防完成)	
1868 年 5 月中旬 (明治元年)	竜洋町, 磐田市, 浜松市, 浜北市において多数の破堤。		伊那谷で氾濫 (7 月上旬にも氾濫)

1875 年		(大千瀬川・相川合流点のショートカット完成)	
1882 年 10 月上旬	浜松市で破堤		
1885 年 7 月上旬			釜口の水位約 2.7m 川路で被害甚大
1889 年 9 月中旬 (明治 22 年)	天竜川で 9m, 二俣川で 4.5m の増水。 竜洋町, 浜松市, 浜北市, 豊岡村で多数の破堤。		下伊那郡で氾濫
1889 年 10 月 (明治 22 年)			阿智村で氾濫
1898 年 9 月上旬 (明治 31 年)	天竜川, 二俣川で氾濫	大千瀬川が佐久間町で破堤 阿多古川も氾濫	
1907 年 8 月 (明治 40 年)			小渋川, 伊那谷で氾濫
1911 年 8 月上旬 (明治 44 年)	鹿島で水位 6.9m。 豊岡村で 1080m 破堤。 磐田郡で計 318 箇所破堤。	気田で連続雨量 1000mm (13 日間)。 竜山村で崩壊土砂が天竜川堰き止め、浦川付近まで背水後決壊し、下流平野に大氾濫もたらす。	伊那谷で日雨量 220mm
1936 年 (昭和 11 年)		(泰阜ダム完成)	
1945 年 10 月上旬 (昭和 20 年)	鹿島で水位 7.12m。 浜松市で約 40m 破堤。		飯田市で被害甚大
1952 年 (昭和 27 年)		(平岡ダム完成)	
1953 年 7 月中旬 (昭和 28 年)			飯田市, 下伊那郡で被害甚大
1956 年 (昭和 31 年)		(佐久間ダム完成)	
1958 年 (昭和 33 年)		(秋葉ダム完成)	
1959 年 (昭和 34 年)			(美和ダム完成)
1961 年 6 月下旬 (昭和 36 年)	鹿島地点戦後 6 位のピーク流量 Q=約 8,400m ³ /s	佐久間ダム戦後 2 位のピーク流量 Q=約 6,100m ³ /s 浦川, 佐久間, 船明, 阿多古等で被害大きい。	宮ヶ瀬地点戦後 2 位のピーク流量 伊那谷で被害甚大 (1715 年の未の満水に匹敵する大災害)
1965 年 9 月中旬 (昭和 40 年)	鹿島 Q=約 8,100m ³ /s	大千瀬川と相川の合流点の佐久間町浦川で氾濫。 気多川大居や天竜川船明でも氾濫。Q=約 4,100m ³ /s	
1968 年 8 月下旬 (昭和 43 年)	鹿島地点戦後 1 位のピーク流量 鹿島水位 6.82m Q=約 10,000m ³ /s 総雨量は浜松 340mm。 天竜市で氾濫	総雨量は佐久間 480mm, 水窪 651mm。Q=約 3,700m ³ /s 佐久間町, 水窪川, 気田川, 船明, 阿多古川で氾濫。	
1969 年 (昭和 44 年)	鹿島 Q=約 8,700m ³ /s	佐久間 Q=約 3,700m ³ /s (水窪ダム完成)	(小渋ダム完成)
1970 年 6 月中旬 (昭和 45 年)	鹿島 Q=約 6,200m ³ /s	佐久間 Q=約 3,800m ³ /s	伊那谷で被害甚大
1973 年 (昭和 48 年)		(新豊根ダム完成)	
1974 年 7 月上旬 (昭和 49 年)	一貫地, 神田, 中ノ町で氾濫。 鹿島 Q=約 7,500m ³ /s	水窪町等、県天竜土木管内で多数決壊。Q=約 2,800m ³ /s	
1977 年 (昭和 52 年)		(船明ダム完成)	
1982 年 7 月下旬 (昭和 57 年)	鹿島地点戦後 3 位のピーク流量 鹿島 Q=約 9,100m ³ /s	佐久間 Q=約 3,700m ³ /s	宮ヶ瀬地点戦後 3 位のピーク流量 三峰川中心に豪雨 伊那谷で被害甚大
1983 年 9 月下旬 (昭和 58 年)	鹿島地点戦後 2 位のピーク流量 鹿島 Q=約 9,500m ³ /s	佐久間ダム戦後最大のピーク流量 Q=約 6,300m ³ /s	宮ヶ瀬地点戦後最大のピーク流量 川路で S36 災と同程度の浸水 (人的被害なし)
平成 3 年 9 月下旬	鹿島地点戦後 4 位のピーク流量 鹿島 Q=約 8,900m ³ /s	佐久間ダム戦後 4 位のピーク流量 Q=約 4,100m ³ /s	
平成 10 年 9 月下旬	鹿島 Q=約 3,600m ³ /s	佐久間 Q=約 1,700m ³ /s	
平成 15 年 8 月上旬	鹿島 Q=約 7,400m ³ /s	佐久間 Q=約 2,600m ³ /s	

1-7 天竜川の治水計画

天竜川下流部の治水計画（工事实施基本計画）は、基準地点・鹿島での基本高水のピーク流量 19,000m³/s のうち 5,000m³/s をダム群で調節することにより 14,000m³/s を河道が分担することとしている。

天竜川下流部の現在の治水整備状況は、完成している治水ダムが新豊根ダムの 1 施設のみであり、ダムによる洪水調節施設の整備が遅れている。

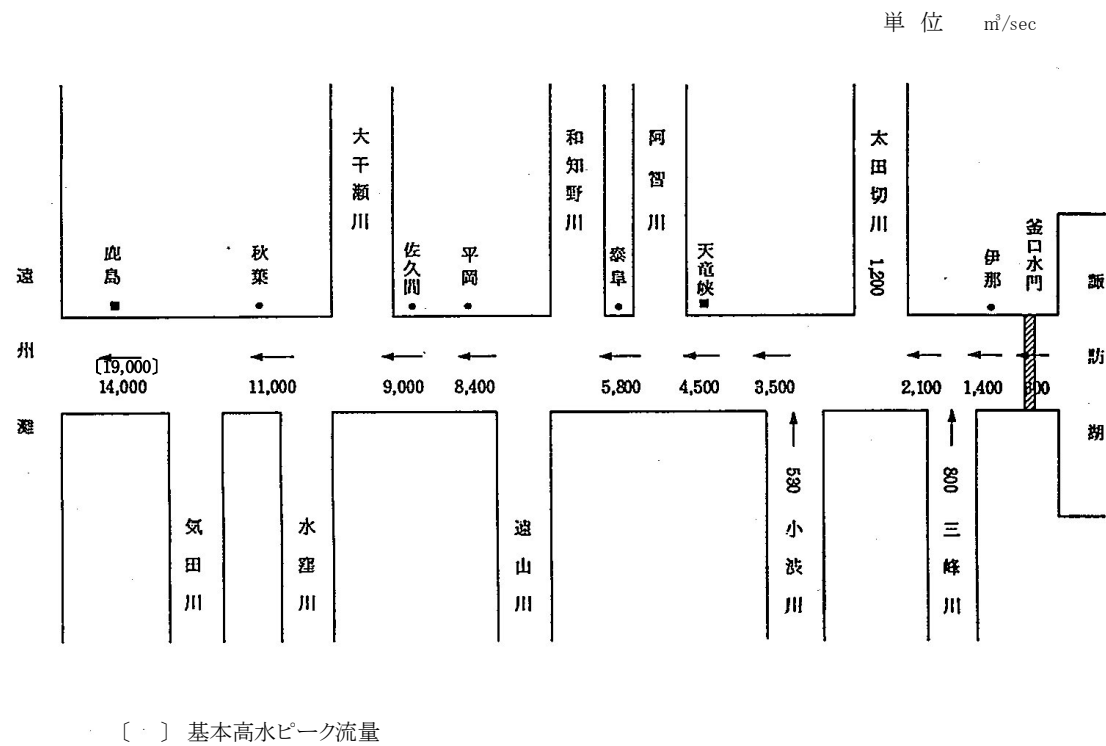


図 1-11 計画高水流量配分図 (単位: m³/s)

1-8 天竜川（中下流部）における水利用

天竜川の水利用は古くから行われ、かんがい用水、水道用水の水源及び発電等に利用されている。特に下流部は広大な耕地を有し穀倉地帯となっている。また浜松市、磐田市等の市街地は天竜川の下流部に形成されている。

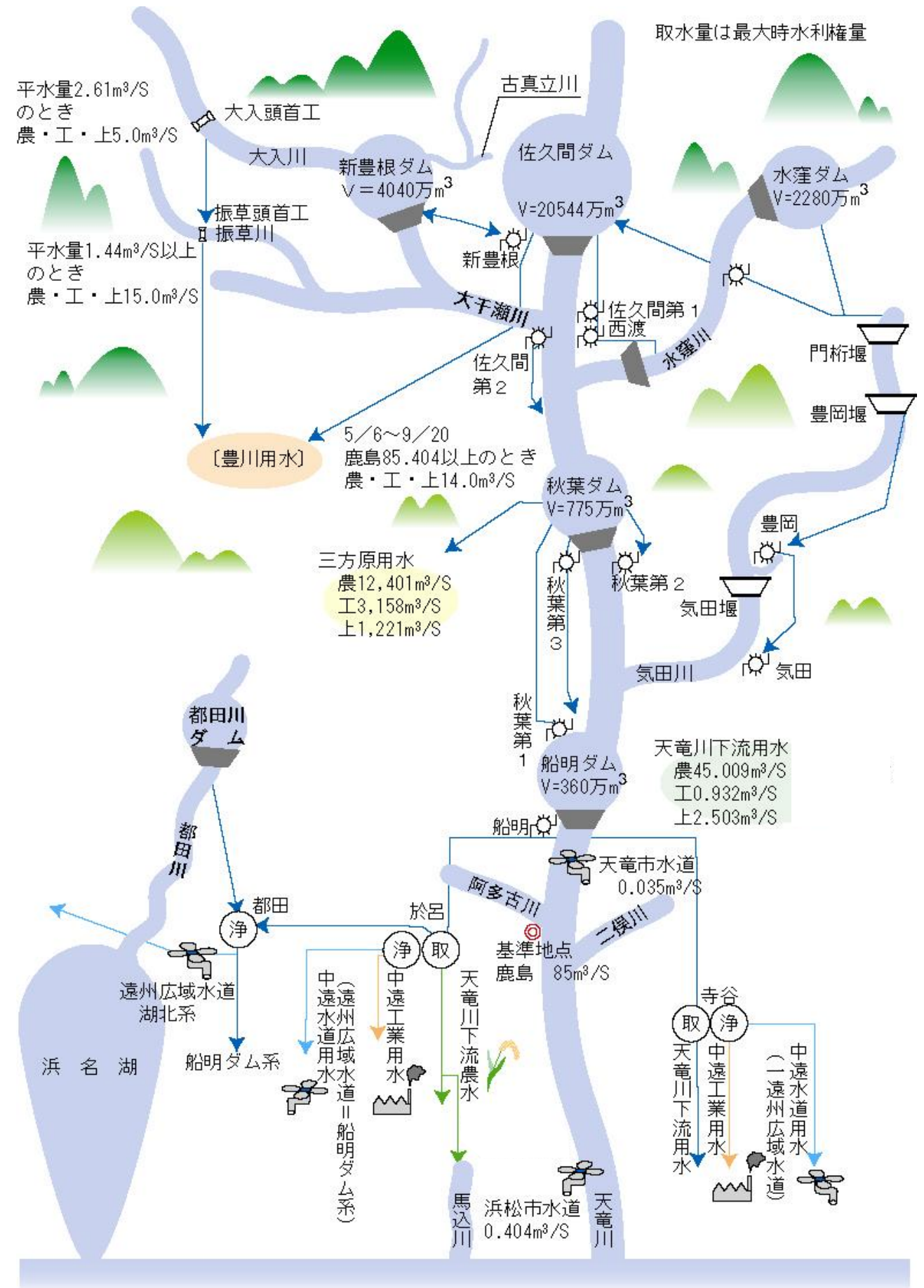


図 1-12 天竜川の水利用（模式図）

1-9 本川ダムの概要

本川に設置されている5つのダムのうち、佐久間ダム上流に位置する泰阜ダム、平岡ダムではほぼ満砂状態、佐久間ダムでは、総貯水容量の約1/3が堆砂している状態となっている。天竜川の本川におけるダムの堆砂状況を図1-13に示す。

表 1-2 ダム諸元表

ダム名	位置	目的	ダム型式	形状			容量		ダム事業者	着手/竣工(年)
				堤高(m)	堤頂長(m)	堤体積(千m ³)	総貯水容量(千m ³)	有効容量(千m ³)		
泰阜	長野県下伊那郡泰阜村	発電	重力式 コンクリート	50	143	128	10,761	1,553	中部電力(株)	1931/1935
平岡	長野県下伊那郡天龍村	発電	重力式 コンクリート	62.5	258	252	42,425	4,829	中部電力(株)	1938/1952
佐久間	静岡県浜松市佐久間町	発電	重力式 コンクリート	155.5	293.5	1,112	326,848	205,444	電源開発(株)	1953/1956
秋葉	静岡県浜松市龍山町	かんがい用水, 工業用水, 発電	重力式 コンクリート	89	273.4	515	34,703	7,750	電源開発(株)	1954/1958
船明	静岡県浜松市船明	かんがい用水, 上水道用水, 工業用水, 発電	重力式 コンクリート	24.5	221	54	10,900	3,600	電源開発(株)	1972/1977
新豊根	愛知県北設楽郡豊根村古真立	洪水調節・農地防災, 発電	アーチ	116.5	311	348	53,500	40,400	電源開発(株)	1969/1972

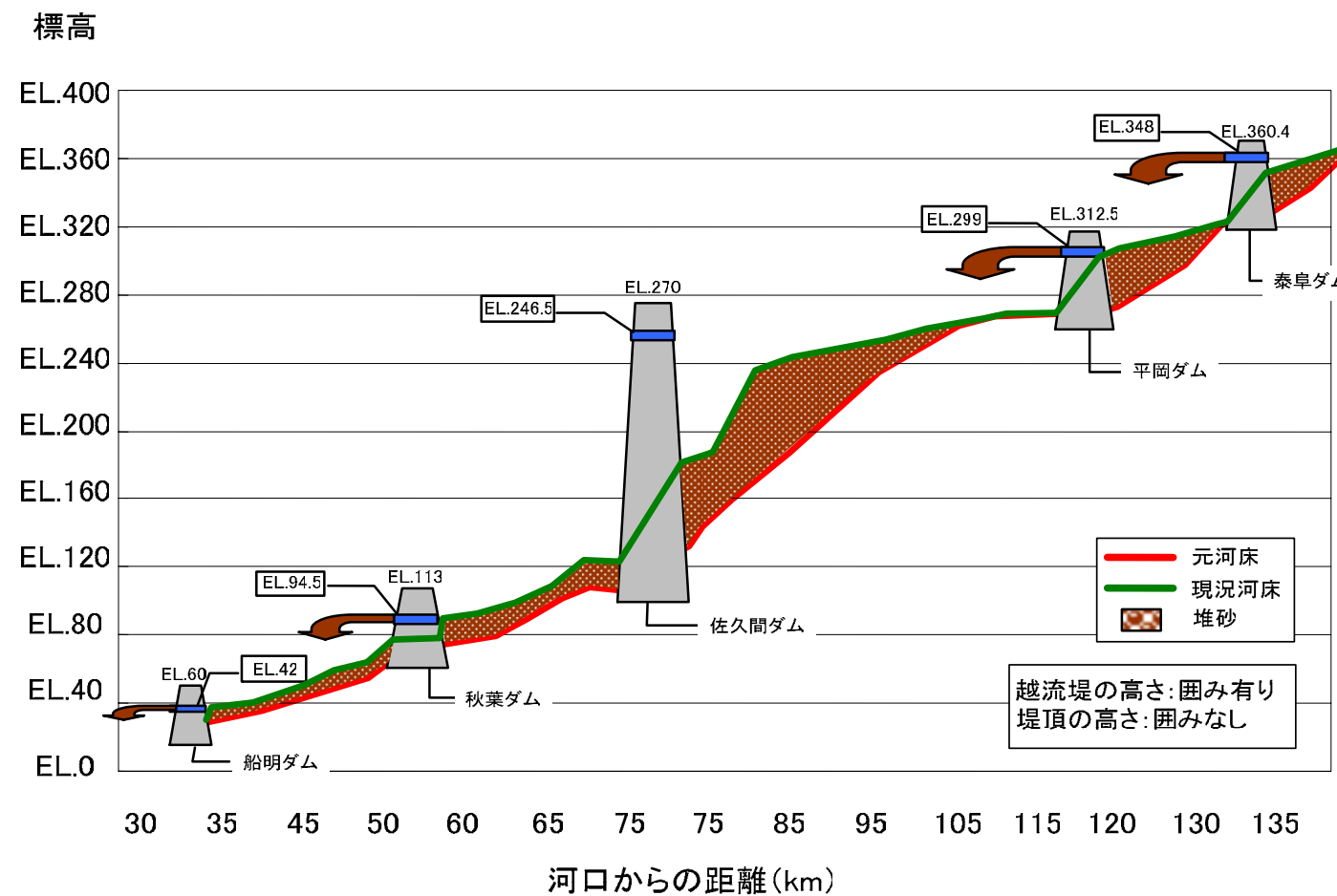


図 1-13 天竜川本川ダム区間縦断面図

1-10 砂利採取の現状

天竜川中流部、下流部における砂利採取は、昭和30年代から50年代にかけて盛んに行われ、14km～25kmの区間では年間400千 m^3 も採取されていたが、近年は佐久間や秋葉の貯水池区間を除けば、従来の半分以下の採取量となっている。

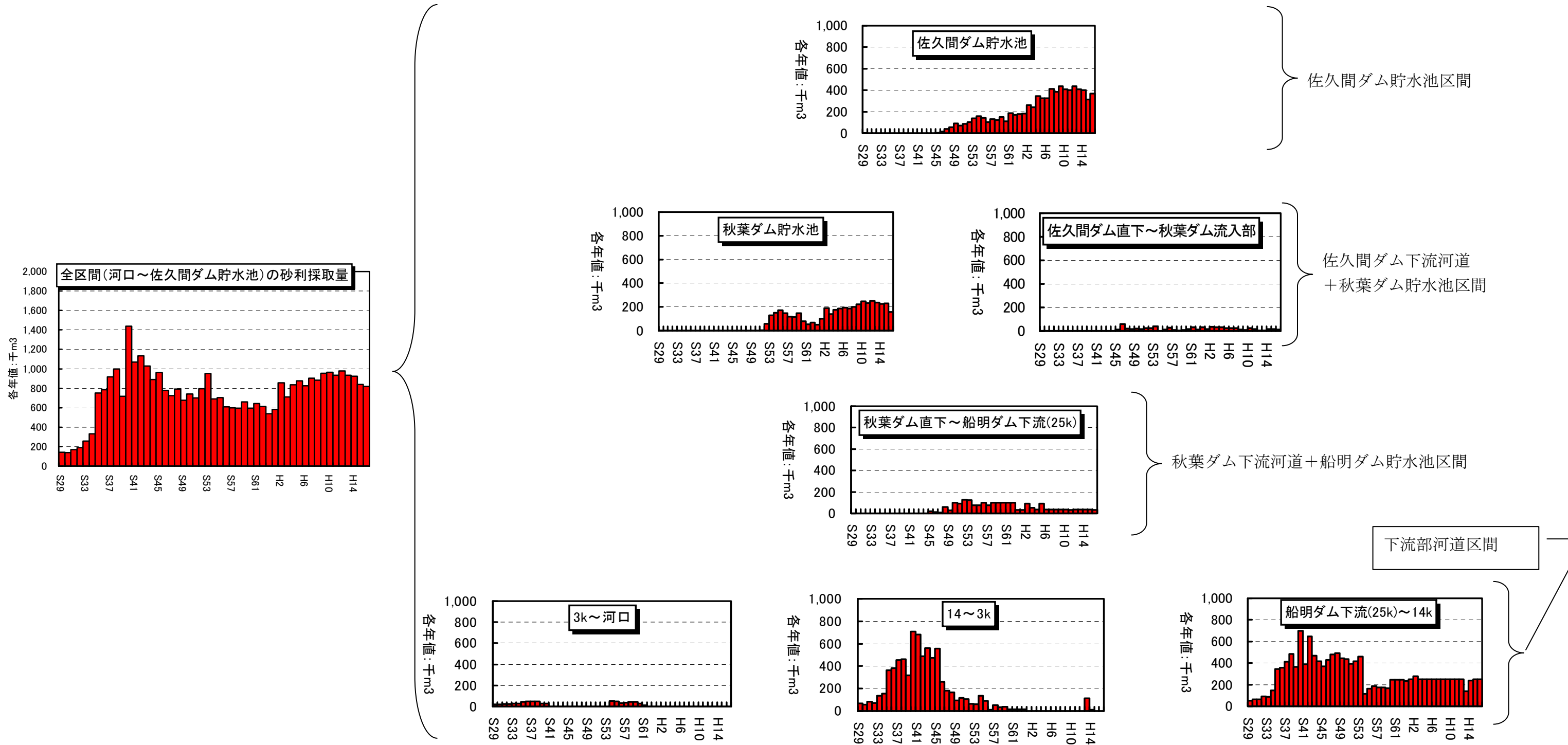


図 1-14 砂利採取量の区間別経年変化

1-11 天竜川中下流部の生物環境

中流部

平岡ダム～船明ダムまでは中流部として区分することができ、山付で自然河岸が多い区間である。この区間の代表的な植生としては、スギ・ヒノキ林が挙げられる。他の植生としては、中下流部に広く分布するコゴメヤナギ群落等が見られる。この区間ではブッポウソウの繁殖が見られ、アユの遊漁が最も盛んであり、オイカワの産卵場も見られる。底生動物としてはヒラタカゲロウ、シマトビケラが見られる。

下流部

船明ダム～第二東名天竜橋付近までは山間地から平野への移行区間であり、河道は大きく蛇行している。河岸の多くは山付区間である。この区間を含め天竜川中下流部の代表的な植生としては、コゴメヤナギ群落等が見られる。他の植生としては、アキグミ群落等が見られる。この区間では遊漁が盛んであり、アユ、オイカワ等が見られる。底生動物としてはチラカゲロウ、トビケラ類が見られる。

下流部

第二東名天竜橋付近～河口からの距離 4km 付近までは川幅が広く低水敷には砂礫州が多く見られ、流路は網状に蛇行している。この区間を含め天竜川中下流部の代表的な植生としてはコゴメヤナギ群落等が見られる。他の植生としては、ヨモギ・メドハギ群落が見られる。この区間では砂礫州にコアジサシが繁殖しており、繁殖地としては全国一となっている。また、遊漁が盛んであり、アユの産卵場も見られる。

河口部

河口からの距離 4km 付近～河口までは感潮域であり、ワンドが発達しヨシ原が広く見られ、砂州も発達している。他の植生としてはカワヤナギ群落等が見られる。この区間でもコアジサシの繁殖が見られるほか、海岸部ではオジロワシの越冬、チュウビの越冬が見られる。

国立公園等の指定状況

鹿島上流から 27km 付近までの左岸側、47.0km～64.4km 付近まで、原田橋～94.0km は優れた景観を有する地域であり、天竜奥三河国立公園に指定されている。

鳥獣保護区等については、鳥獣保護区が秋葉ダム、船明ダム及びダム湖、鳥羽山公園付近 (25km)、河口部にある。また、鉛散弾規制地域が掛塚橋(3km)から東名高速道路(11km)までの区間となっている。

中流部
山付区間で自然河岸が多い
秋葉ダム、佐久間ダム直下は水量が少ない
【植物】
コゴメヤナギ群落、スギ・ヒノキ林、シイ・カシ萌芽林、カワラハンノキ群落
【鳥類】
ブッポウソウの繁殖
【魚類】
アユの遊漁が最も盛ん、オイカワの産卵場(造成)
【底生動物】
ヒラタカゲロウ、シマトビケラ



スギ・ヒノキ林
中流部の代表的な植生



コゴメヤナギ
中下流部の代表的な植生

下流部
山間地から平野への移行区間、河道は大きく蛇行
【植物】
アキグミ群落、コゴメヤナギ群落、ヨモギ・メドハギ群落
【魚類】
遊漁が盛ん
アユ、オイカワ、シマヨシノボリ
【底生動物】
チラカゲロウ、トビケラ類



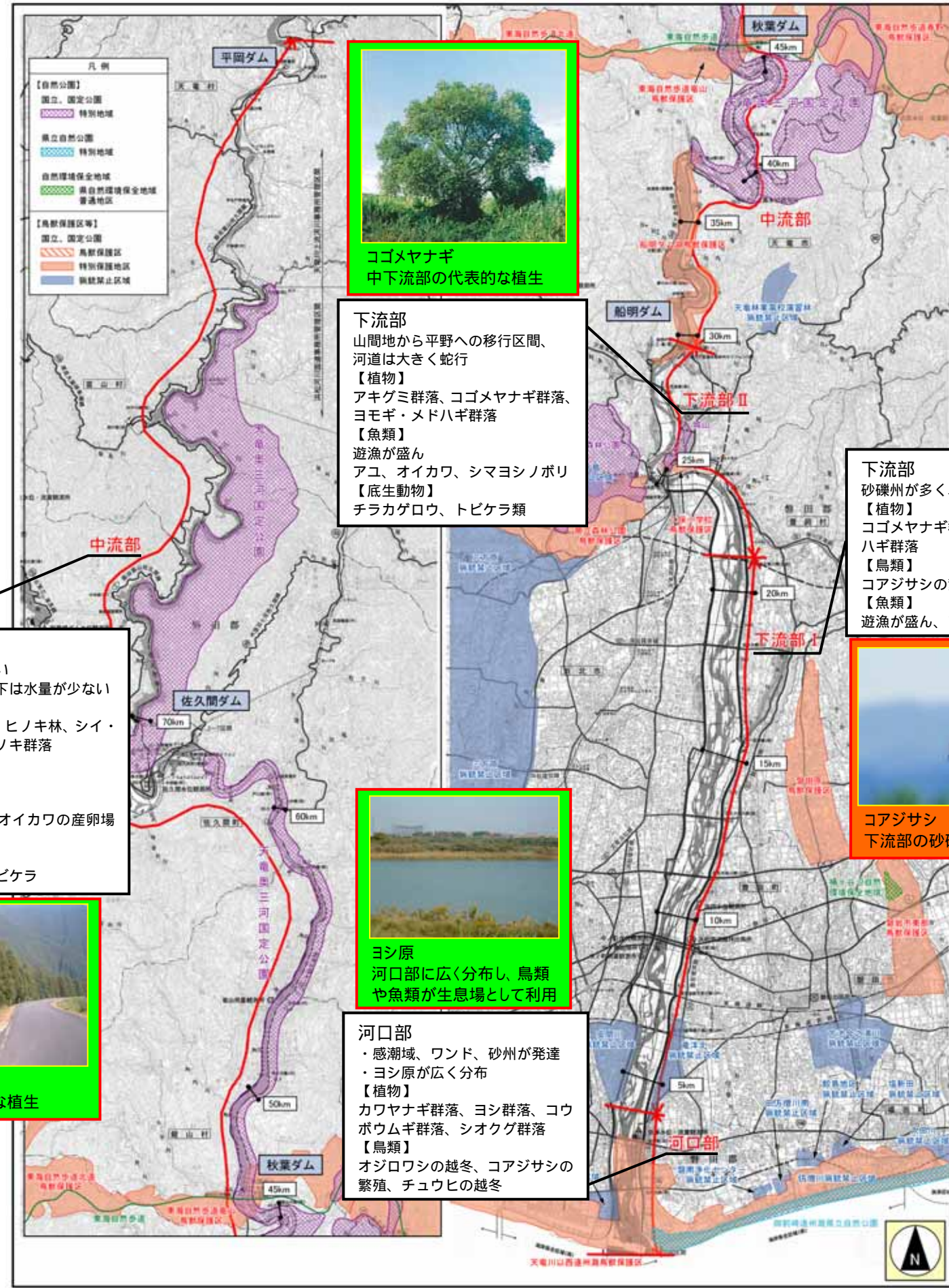
ヨシ原
河口部に広く分布し、鳥類や魚類が生息場として利用

河口部
・感潮域、ワンド、砂州が発達
・ヨシ原が広く分布
【植物】
カワヤナギ群落、ヨシ群落、コウボウムギ群落、シオクグ群落
【鳥類】
オジロワシの越冬、コアジサシの繁殖、チュウビの越冬

下流部
砂礫州が多く、流路は網状に蛇行
【植物】
コゴメヤナギ群落、ヨモギ・メドハギ群落
【鳥類】
コアジサシの繁殖地
【魚類】
遊漁が盛ん、アユの産卵場



コアジサシ
下流部の砂礫地に生息



【右図の出典】平成 16 年度 天竜川水系(中下流部) 河川水辺総括資料作成調査 報告書

図 1-15 天竜川中下流部の生物環境

1-12 河口～海岸の生物環境

遠州灘沿岸の海岸は大部分が砂浜であり、その一見単調に見える砂浜海岸も、海と陸とが接した生態系の移行帯（エコトーン）が形成されている。砂浜には、コウボウムギ、コウボウシバ、ハマヒルガオ、ハマボウフウ、ハマエンドウ、ハマニガナ、ハマアザミ、ケカモノハシ、汀線付近のオカヒジキなどの海浜性植物の生育が見られ、砂丘背後のクロマツ林へと移行する

海岸の動物では、それぞれの環境に適した種が生息しているが、全国的にも有数のアカウミガメの上陸・産卵地であることが特徴である。アカウミガメは、野生動物の国際取引を規制するワシントン条約で最も規制の厳しい付属書Ⅰに記載され、わが国における種の保存法の国際希少野生動物種に指定されている。環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧Ⅱ類（VU：絶滅の危険が増大している種）に、愛知県のレッドデータブックでは絶滅危惧ⅠB類（EN：近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種）となっている。延べ上陸個体数については年々減少傾向にあり、その原因として、砂浜の減少、海岸を走る自動車の灯りや観光客の花火などが指摘されている。なお、遠州灘のアカウミガメは、5月下旬から8月下旬までの約3ヶ月間に沿岸の各地の砂浜で上陸・産卵が確認されており、砂地に穴を掘って産卵、50～90日でふ化し、地中から這い出し海へと出ていく。

上陸・産卵場所について、静岡県域ではほとんど全ての海岸で、アカウミガメの上陸・産卵がみられる。なかでも、御前崎海岸のアカウミガメ及びその産卵地が国指定天然記念物に、浜松海岸のアカウミガメ及びその産卵地が浜松市指定天然記念物となっている。

静岡県域の砂浜には、カモメ科に属する小型の夏鳥で種の保存法の国際希少野生動物種に指定されるとともに、環境省のレッドデータブックによると絶滅危惧Ⅱ類であるコアシサシが産卵に訪れる。遠州灘はコアシサシが自然の砂浜で営巣する、日本において数少ない海岸の一つとなっている。また、汀線付近にはスナガニやフジノハナガイ、クロマツ林内にはキツネなどの哺乳類などが生息している。

【出典】遠州灘沿岸海岸保全基本計画（平成15年7月 愛知県・静岡県）

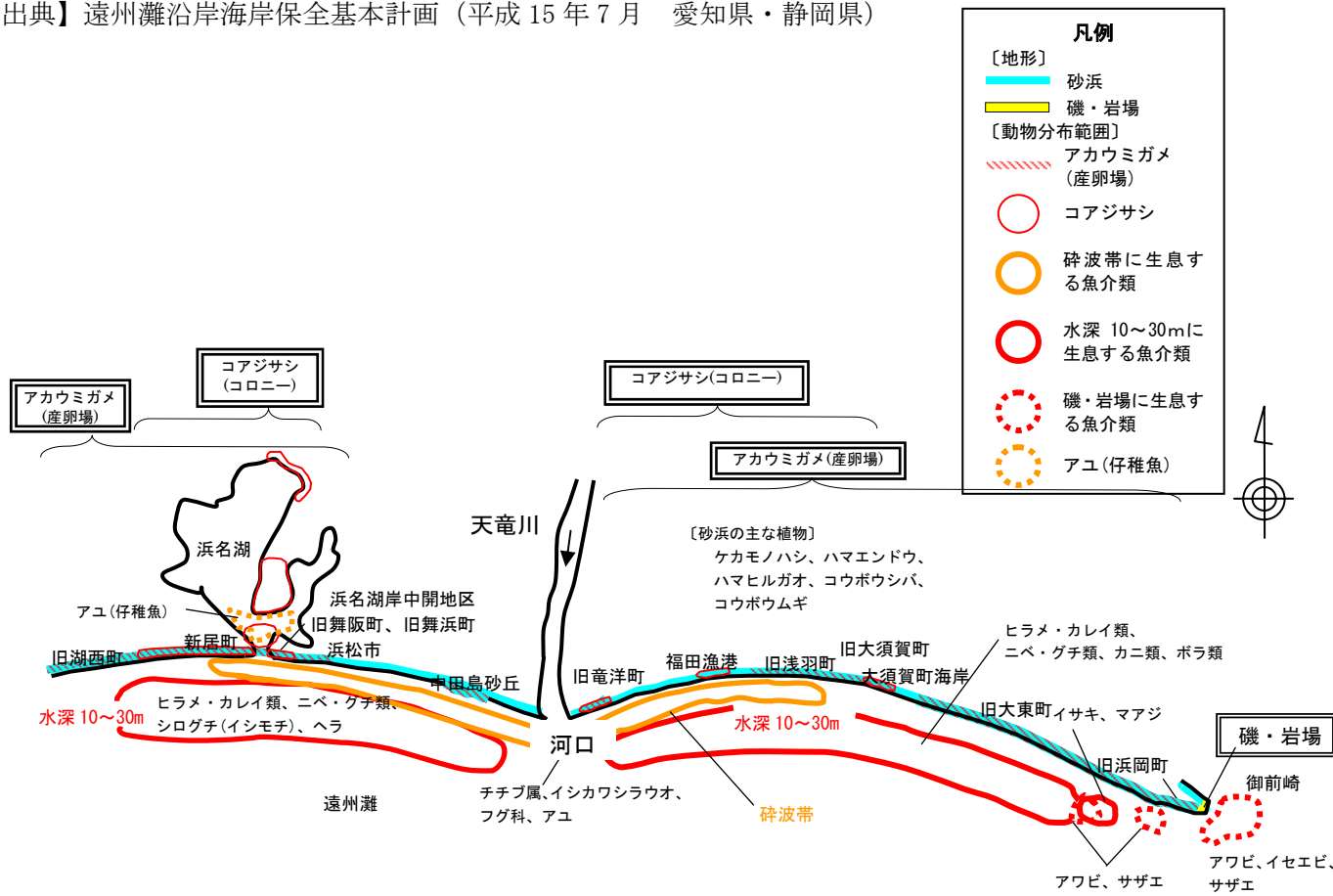


図 1-16 河口～海岸の生物環境の概要

1-13 漁獲等

(1) 内水面漁業の漁獲高推移

天竜川における内水面漁業の漁獲高を図 1-17 に示す。

平成15年度の天竜川内水面における漁獲量は109tで、このうち101tはアユである。

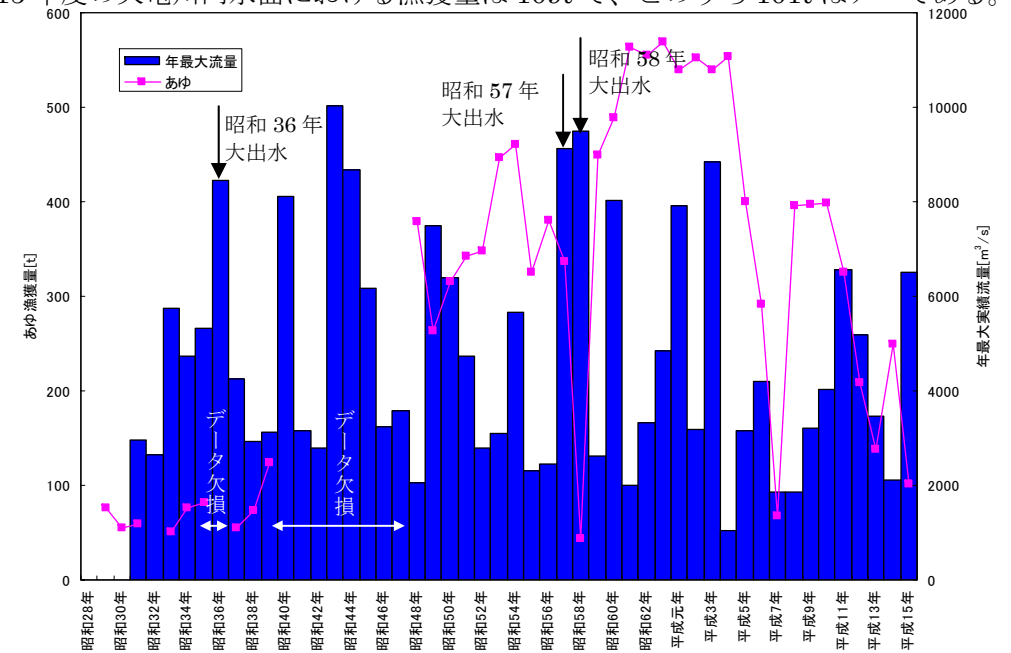


図 1-17 天竜川における内水面漁業漁獲高（総漁獲量）

(2) 海面漁業の漁獲高推移

天竜川河口周辺における海面漁業の漁獲高を図 1-18 に示す。

海面漁業の漁獲高は平成10年以降（平成14年を除く）、5種の合計漁獲量は15t前後で割合が高いのはしらすである。

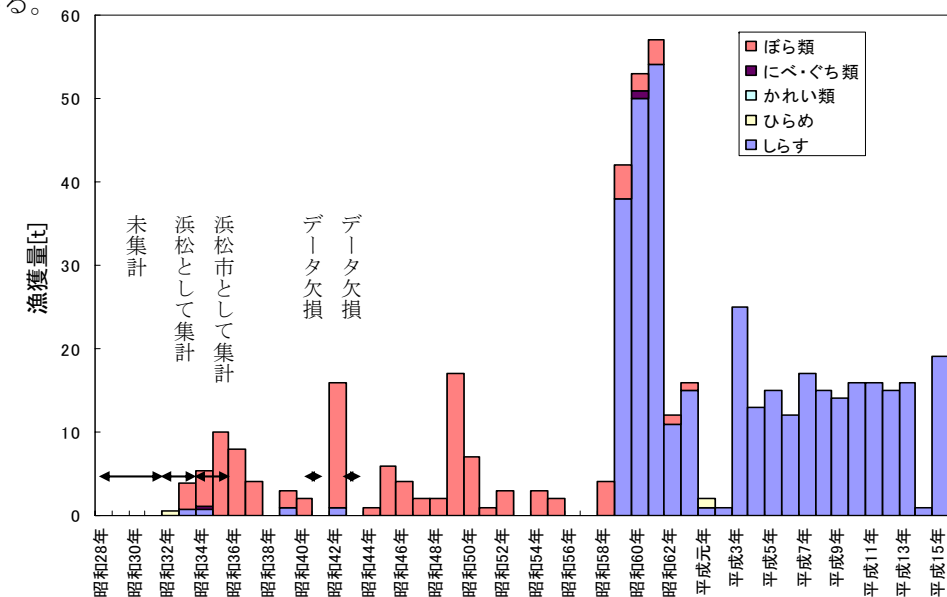


図 1-18 遠州浜松における漁獲高（総漁獲量）

出典：静岡県農林水産統計年報（昭和28年～昭和40年）、静岡県農林水産統計年報 水産編（昭和41年～平成15年）

※内水面漁業の昭和36年は資料入手が不可能であった年。昭和40年～昭和47年のデータ欠損は生産量のみ統計に記載されている年。
 ※海面漁業の漁獲量は天竜川河口及びその周辺部で確認されている魚種でかつ資料に掲載されている種(ぼら類、にべ・ぐち類、かれい類、ひらめ、しらす)の漁獲量を再集計した値。
 ※海面漁業漁獲高で昭和28～32年は浜松として未集計。昭和33、34年は浜松、昭和35、36年は浜松市、昭和37年以降は遠州浜松として集計されている。(昭和41年及び43年については資料入手が不可能であった年)